The world of space through my eyes

20年来グローバル コミュニケーションズ エキスパート。元JAXAエグゼクティブ アドバイザー（広報・国際担当）、国立大学法人山口大学客員教授（国際関係＋コミュニケーション論）、評論家・オピニオンリーダー。東京生まれ、英国育ち。講演、テレビ、執筆、政府委員など、マルチに活躍する中で、IRと都市開発のコンサル会社代表も務める。
http://www.nishiuramidori.com

連載 第13回

“国際派大和撫子”が伝える宇宙の開発現場

にしうらみどりの

「宇宙の窓から」

第9回イラン・ラモーン国際宇宙会議

2003年、スペースシャトル「コロンビア号」は、ガン治療や排ガス削減などの環境問題に役立つ80種類以上の化学実験を行うことも重要なミッションの一部として打ち上げられましたが、地球に帰還する際の大気圏再突入時に大爆発を起こし、クルーメンバー7人は帰らぬ人となってしまいました。船員の1人で元イスラエル空軍のパイロットだったイラン・ラモーンさんは、その後イスラエル人初の宇宙飛行士になり、アメリカ合衆国名誉宇宙飛行士勲章を外国人で唯一受章した人。

積んでいた高感度白黒カメラで「スプライト」と呼ばれる閃光の撮影に成功、「空と宇宙は連続している」という言葉を残しています。近年では、NHK協力のもと超高感度ハイビジョンカメラで鮮明なスプライト画像撮影に日本の古川聡・宇宙飛行士が成功しています。

駐日イスラエル大使のルツ・カハノフ氏

1月下旬、テルアビブでラモーンさんの功績を讃えた第9回イラン・ラモーン国際宇宙会議が開かれ、筆者は招待を受け出席してきました。2日間にわたる会期中、イスラエル宇宙局のメナヘム・キドロン長官と話をしました。

以国が宇宙観測・探査分野で研究開発の先進国グループ内に位置を占めることや、宇宙研究開発に必要な技術・知識・科学的基盤（研究所や人材）などにも恵まれていることを丁寧に説明して下さった上で、日本の同分野も、世界的に高く評価されていることを熟知、ぜひ日・以共同研究開発を望んでいることを強調しておられました。

東京では、ルツ・カハノフ駐日イスラエル大使からも出発前に貴重な話を伺いました。実は、筆者の以国との付き合いは平成3年、故・アモス・ガノール前駐日大使の時代に遡るので、昔話に花を咲かせた後、カハノフ大使から以国の解説がありました。

イスラエル宇宙局のキドロン氏

国土の小さい以国はエネルギー資源に乏しく、アラブ諸国とは日常的な緊張関係にあることは周知ですが、1948年の独立以降は様々な分野で産業を成長させ、国際社会でも存在感を大きくしているとのこと。特に近年、ハイテク産業やIT産業、医薬品といった分野での成長は著しく、同国にはグーグルなど世界に名立たる企業の研究室や支社が置かれています。

もちろん、国防力を高めるために、そうした分野が成長してきたのも確かですが、イスラエル人の「めげない」という国民性が大きく寄与しているそうです。

さて、宇宙分野では、日以両国がウインウインの関係を築くことができるか、その中身が双方から見て共感、納得できる内容になるかが、これからの課題だと筆者は思います。誠実と品格が相互に尊重されることによって、両国の絆はより一層、深まることでしょう。